

Penny McKay 先生訪問

2005 年 3 月 18 日（金）16：00～17：00

Queensland University of Technology にて

訪問者：川上先生、塙、山田（文責）

雨がちらつく中、Queensland University of Technology (QUT) まで、ESL Bandscales の著者の一人である Penny McKay 先生を訪ねた。QUT のケルビン・グローブ・キャンパスには坂が多く、近代的な建物が立ち並んでいる。平坦で広々とした UQ のキャンパスとは好対照である。

Penny 先生はお忙しいなか、私たちとの時間を作ってくださり、あたたかく迎えてくださった。

1. Penny 先生の最近のプロジェクト

川上先生の方から、日本での JSL バンドスケールのお話をすると、Penny 先生は大変興味を示された。日本で現在、学校の先生方に試行版を使っていただき、フィードバックをもとにまた改訂していくのだ、という話をすると、Penny 先生は、ESL バンドスケールの改訂版作成に向けたプロジェクトについてお話してくださった。

プロジェクトでは、ベテランの ESL の先生方にインタビューを行い、ESL バンドスケールについて詳しいフィードバックをもらい、問題点やギャップ、現状に合わない点などを挙げてもらったそうだ。その結果、いくつかのレベル・スキルで弱いところが見られたが、おおむねにおいて ESL バンドスケールはつかいややすいという結果が得られたという。今後はさらに、教師がどのようにバンドスケールを使い、実践しているかを調査すると共に、政策全体の中でバンドスケールを位置づけながら、ESL バンドスケールの効果や意義を明らかにしていきたいそうだ。特に、バンドスケールをつかってどう授業を組み立てるか、バンドスケールを使うことによってどのような「Beneficial impact (利益ある効果・影響)」があるかという点について、明らかにしていきたいそうだ。

この、バンドスケールをつかうことによる Beneficial impact については、JSL バンドスケールにおいても、ESL バンドスケールにおいても重要だ、という点で大変盛りあがった。

なお、改訂版 ESL バンドスケールは 2006 年末ごろ刊行をめざしているそうだ。

2. 在籍学級の教師と ESL バンドスケールについて

在籍学級の先生方とバンドスケールについて伺ったところ、Penny 先生は「在籍学級の先生方はとても忙しい。もちろん、バンドスケールのレベル判定の基準にいつも立ち戻ってほしいのだけれど、このような簡易バージョンのチェックリストが使われています」といって資料を見せてくださった。それは、様々な学校の先生方が使いやすいように作成したチェックリストなどで、A3 1 枚に話す、聞く、読む、書くのレベル項目がまとめられ

ていて、教師はマーカーで該当する項目にしるしをつけるだけ、というフォーマットのものを始め、様々な形式があった。

Penny 先生は、基本的にはオリジナルのレベル項目を見てほしいが、在籍学級の先生方は言語学の知識があるわけではないので、このような簡易バージョンがつかわれるのかまわない、という見解を示された。ただ、ESL の教員はバンドスケールを熟知していることが期待され、在籍学級の先生は ESL の教員のサポートを受けながらバンドスケールを理解し、使っていくのだという。

また、ESL バンドスケールはもともと在籍学級での評価を意識して作られたもので、改訂版ではさらに、「サポートがあれば～～できる」と言った項目については、どのようなサポートを指しているのかを具体的に示すことで、在籍学級の先生方が、ESL 児童・生徒に在籍学級での授業の中でサポートをしていくよう配慮していくそうだ。具体的な指導法が記述され、在籍学級の先生にもつかいやすくなった改訂版バンドスケールの完成が楽しみである。

◆簡易版チェックリストの実例が収められた参考資料：

Assessing ESL learners in schools using the NLLIA ESL Bandscales. (Association of Independent Schools of Queensland Inc.より、1999 年出版)

3. Penny 先生の新しい著書

第二言語および外国語として言語を学ぶ生徒の評価について、2005 年中ごろ、Penny 先生が執筆された本が出版されるそうだ。タイトルは Assessing young language learners. (Cambridge University Press より)。この本では、ESL と、外国語教育、両方についての評価について、その共通点および違いについて述べた大作だそうだ。学部学生よりも大学院の学生向けのテキストに適した内容だそうだ。

4. 終わりに

表敬訪問のみの予定だった Penny 先生訪問だが、大いに盛り上がり、新しい研究の動きや JSL、ESL 共通の問題意識や関心事項などが話の中でぽんぽんと飛び出してくる、非常にエキサイティングな訪問となった。つい時間を忘れ、小 1 時間ほどがあっという間にすぎた。JSL バンドスケールの試行や実践にも大変興味を示してくださった。オーストラリアの ESL バンドスケールを参考にして始まった JSL バンドスケールの動きだが、日本での実践に基づく問題意識や疑問が ESL バンドスケール生みの親の一人である Penny 先生と共有でき、しかも大変熱心な興味を持たれたことに、大きな手ごたえを感じた。

別れ際、Penny 先生は、「講演などで日本に呼んでくれるときはいつでもどうぞ」と言ってくださいました。国を超えて、言語を超え、子どものことばを支える研究者同士が意見、情報を交換できることのすばらしさと可能性を感じた訪問となった。

報告者 山田裕子